

小中一貫教育のこれまで、そして、これから

千葉大学名誉教授 ^{あまがさ}天笠 ^{しげる}茂

1 千葉県における義務教育学校

－2022（令和4）年4月現在－

2016（平成28）年度から、義務教育学校、中学校併設型小学校及び小学校併設型中学校が制度化された。これにともない、2022（令和4）年4月現在、千葉県における義務教育学校は、次のとおりである。

- ・市川市立塩浜学園（2016（平成28）年4月開校）
- ・成田市立下総みどり学園（2017（平成29）年4月開校）
- ・成田市立大栄みらい学園（2021（令和3）年4月開校）
- ・八千代市立阿蘇米本学園（2022（令和4）年4月開校）

ちなみに、文部科学省の令和4年度学校基本調査（速報値）によれば、義務教育学校の数が全国178校、在籍者数は6万8千人、教員数は6千3百人で、昨年度より27校増加とのことである。これに併設型小中一貫校や連携型小中一貫校を加えると、小中一貫教育を施す学校が着実に増えつつある。

しかし、どのような形や中身をもって小中一貫教育というのか。その内実が問われる段階に至っている。

小中一貫とか、小中連携を掲げながらも、旧来からの小学校と中学校がそこにあって、実質はかつてと余り変わらない小中一貫も存在している。小中一貫教育は創設の段階を越えて、次の段階に差しかかりつつあるとみられる。形や制度の整備にともなう実質が問われる段階へ推移しつつある。

2 小中一貫教育の出発点は？

ところで、千葉県における小中一貫教育の出発点は、どのあたりにあるのだろうか。それぞれの市町村において小学校と中学校との連携を図る動きは、すでに昭和の時代から様々になされてきたとみられる。

その上で、県をあげての動きとして、2000（平成12）年から3カ年、文部科学省の研究開発学校を引き受けた和田町を中心になされた研究開発をあげておきたい。県教育委員会のバックアップのもと、県立安房農業高等学校・和田町立和田中学校・和田小学校・北三原小学校・南三原小学校による12年間を通して教育課程の研究開発がすすめられた。

もっとも、小・中・高校の間をつなぐ働きかけは、それ以前、1996（平成8）年4月より「ちば新時代5か年計画」の一環として推進された「夢を育む教育の推進事業」に見ることができる。「夢を育む教育推進地域」では、小・中・高校、家庭及び地域社会が相互に連携する実践研究がなされている。

そこでは、中学校区をエリアにして小学校と中学校などとの連携が説かれた。ちなみに、千葉県教育委員会『平成9年度 夢をはぐくむ教育実践資料集』（平成10年3月）には次の中学校区における実践が集録されている。

・浦安市立浦安中学校区 ・東金市立東金中学校区 ・大多喜町立西中学校区 ・館山市立第二中学校区 ・富山町立富山中中学校区 ・船橋市立葛飾中学校区 ・松戸市立六実中学校区 ・八街市立八街南中学校区 ・銚子市立第八中学校区 ・茂原市立南中学校区 ・木更津市立太田中学校区

これら中学校区においては、小・中・高等学校の連携に関する実践として、合同文化祭、部活動交流、体験入学等の実施や相互の授業参観、情報交換会、合同研修会などを実施し、学校の枠を越えた取組が推奨された。

このうち、浦安市立浦安中学校、浦安小学校、北部小学校、東小学校からなる浦安市立浦安中学校区においては、小中学校教育の連携事業の一つとして、小学校、中学校の教員による授業や行事の相互参観などが実施されている。また、小・中の地域交流として、新入生一日体験入学や吹奏楽合同演奏会などが行われている。

いずれにしても、これらは小学校と中学校との連携を促す先駆的なプロジェクトであり、その後の小中一貫教育が生まれる地ならし的な事業としてとらえることができる。

3 人口減少地域における小規模化への対応

一方、千葉県における小中一貫教育を推し進める大きな要因となったのが児童生徒数の減少であり、これにともなう小規模校対応にあった。その代表例として、鴨川市立長狭学園がある。同校は、3小・1中の統合を経て、2009（平成21）年4月、小中一貫校「長狭学園」として開校した。小学校第4学年までを収容する校舎を新設し、改修となった旧長狭中学校の校舎に第5学年から第9学年の児童生徒を収容する取組に多くの関係者が注目した。

その後、県内各地域において小学校と中学校の連携や一貫をめざす動きが広がり見せるなかで、また、国における制度面の整備が進められるなかで、2017（平成29）年1月29日、小中一貫教育の推進をめざして県教育委員会の主催によるパネルディスカッションが、県総合教育センターを会場に開催された。

それは、2016（平成28）年から2カ年、千葉県の小中一貫教育の推進を図る事業の一環として開かれたもので、県内の義務教育学校及び小中一貫教育実施校における実践事例、

進捗状況、課題などの、共有をめざすとして設けられたものであった。

4 先に歩む学校はメンテナンスを

このような経過のなかで千葉県における小中一貫教育は進展してきたわけである。しかし、その5年、10年と時間が経過するなかで、先に歩んだ小中一貫教育校には一定の期間の経過にともなう組織的な疲労の蓄積やマンネリ化の進行も心配される。

開校の理念や精神が忘れ去られてしてしまったところはないか。あるいは、教育課程に贅肉がついたところはないか。小中一貫教育校として開校した学校も10年もたてば、当初の精神を再確認したり、必要ならば新たに構築したり、といったメンテナンスも必要である。とりわけ、看板は小中一貫校とか、〇〇学園などと掲げながらも、従来からの小学校と中学校が同居するにとどまったり、あるいは、回帰したりしている学校の修繕が求められる。

確かに、「小中一貫校」、「施設一体型小中学校」、「小中学校併設校」、「小中一貫教育校」、「小中一貫型（教育）学校」と称する小中一貫教育校が、千葉県の小中一貫教育をここまで進めてきた。しかし、どのような小中一貫教育校なのか、制度面においても、また、内容面においても、わかりにくくなっている現状もある。これをどのようにメンテナンスしていくかに小中一貫教育のこれからがかかっている。

その意味も込めて、9年カリキュラムや組織運営などリニューアルを遂げる小中一貫教育校に次の段階への牽引を期待したい。

【参考文献】

- ・千葉県教育委員会『平成9年度 夢をはぐくむ教育実践資料集（第2集）』指導資料131集 1998年3月
- ・天笠 茂「町内5校の連携による12年間を見通した教育課程の研究開発－農学科・町民科の試み－」『千葉教育』令和3年菊 670号 2021年10月